

地域活性化という「遊び」

18

京都市
福知山市 「みわ・ダツシュ村」から

山本晋也

今 は人口11人という小さな小さな集落に暮らしていますが、人口2000万人とも言われるロサンゼルスやニューヨークに暮



アシナガバチに刺された逆襲で蜂の巣を取りにいき見事蜂の子をゲット

らしたことがあります。さすがに豊かな国アメリカ人種のるつぽと言われるくらいその豊かさを求めて世界中から多様な人が集まります。人間の数は少ないですが豊かな自然が残る我が集落もそれと同様、もしくはそれ以上に違った意味でその豊かさを求めて様々な生き物が集まります。子供達が喜ぶチヨウチヨ、カブトムシ、クワガタはもちろんバッタ、トンボ、カエル、トカゲ川にはカワムツやどんこ山には捕まえて食べたら美味しい野ウサギ、シカ、イノシシ。多様ということは一人間の都合に関係なく

想定外の危険に

子供だけで対処しなければならぬ時

とにかくいろいろなやつらが集まることを意味するので当然子供が喜ぶ良いやつもいれば悪いやつもいるわけでして蜂、ムカデ、蛇は当たり前。熊なんかもたまーに目撃情報があったりします。ただし蛇は悪いやつと悪くないやつに分かれており悪くないシマヘビなんかは子供のおもちゃにされた挙句リュックに閉じ込められたりして知らずに開けた母親がとてもしつくりすることもあります。悪いやつの代表はやっぱりマムシ。さすがに特徴のあるいかにも悪そうなリュックスなので



シマヘビは日常のおもちゃです

リュックに入っていることはなく見つけたら速やかに大人を呼ぶように教えてありますが大人が近くにいない時は子供の判断で殺してしまったり生けどりにしたりすることもあります。迷っていると逃げってしまうのでその時現場にいる人間とその時持っている道具で

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを運営するも食材を種から作ってみたいくなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダツシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダツシュ村副村長。



蛇や蜂の他にも
漆という
危険なもの
あります

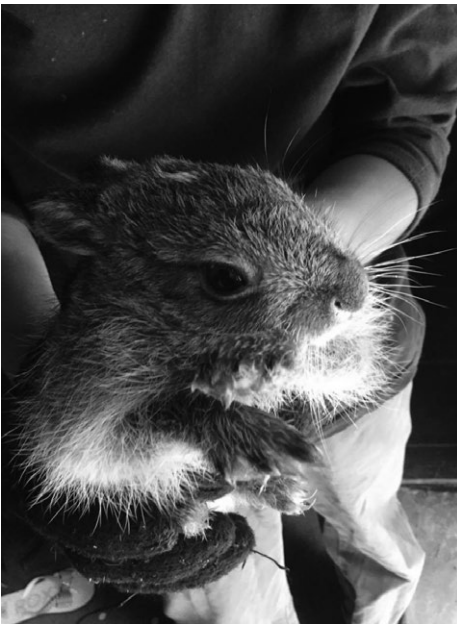
捕獲されたマムシ。
みわ・ダッシュ村の
焼酎に漬け込む
そうです



共同作業の
合間に聞く
お年寄りの話は
僕の楽しみ
の一つです



野ウサギを
捕まえたことも



マムシと同じくらい
いやそれ以上に危険と思われ

草刈シーズン真っ最中でエンジンを背負っている僕には全くとどかずしようがないから色々考えた挙句ただただ殺すというのも勿体無いということまで生けどりに挑戦。こんなことをすると子供の成長より安全第一という方針の学校では間違いなくこっぴどく叱られると思います。うちの場合君たちが現場でそう判断したのならそれでOK。褒められもせず叱られもせずといった感じですよ。なぜなら大人が思う以上に子供はしっかり考えているからです。

るのがスズメバチで春頃巣を作り始める女王蜂を駆除すれば夏頃数百匹のスズメバチを駆除したのと同じ効果があるとの情報を得てせつせとトラップを作る僕に「確かにスズメバチ減ったらいいけど、畑に青虫とか増えるんちゃう?」と長男に言われてハッとしました。彼はアリとか蜂とかが好きで色々調べていて蜂が何を食べているか本を読んで知っているだけではなく実際に蜂が青虫を捕獲するのを畑で目撃したりもしているし大人のように一つの作物の栽培のことだけを考えて畑をしているわけではないのでこういうものが見方ができるのでしよう。

いくら多様な自然があってもそれに気がつかなければなにも学びはありません。人数は少ないですが暮らしの中で幼い子供から少年、青年、壮年そして86年生きてきたお年寄りまでいろんな目線を通した意見を日常的に聞けるのはとても素晴らしいことだと改めて気がついた8年目の夏でした。